



第675号  
令和3年9月23日  
題字は二代真柱様  
大阪市北区池田町13-17  
天理教はるのひ分教会  
TEL・FAX  
06-6358-2630

読者へ  
はるのひ館



心の成人をめざして  
「よいび・つしみ・はたらき」

### 『運命を作り変えるとは』③

『一日一回おさづけ』の最後の方は、「名称の理に神が働く」P.210と題してKさんのおたすけ話になっています。

Kさんは戦争前からの年季の入ったモルヒネ中毒患者で、欲望をとげるそのやり口は悪らつを極めています。

父も未経験なことばかりでだまされ続けますが、何とかたすけようと夫婦で辛抱強くお世話をします。

恩をあだで返され、とうとうたまらず追放するけれどまた帰ってきて居ついてしまう、その繰り返し。

そのあいだ、Kさんは変わらないが父と母はだんだん心の成人が深まります。

例えば、すもうで強い相手に負かされながら何度も挑戦するうちに、こちらの潜在力がしだいに引き出されるように。

二人の心はいつそう純粹になり、いつしか親のような心に近づきます。「成人とは親の心に近づくことである」。

二人が到達したその境地は不思議にKさんにも通じ、十五年目にしてKさんは自発的に改心し最後の秘密を告白します。

この実話で実証されるように、人をたすける苦労は並大抵ではありませんが、真剣であればあるほど

その人自身を美しく磨き上げ、相手がたすかるか否かに関わらず、その人の人間性の豊かさを内奥から開発します。

さらに父はKさんの苦悩にも近づきます。「Kさんも苦しんでいる。モルヒネの注射が好きで溺れているのでは決してない」と。

つまり心のありかたと生き方と運命—この三者の密接な関係についてしだいに深く学びます。

人間は自分の癖性分や因縁は分らないが、人の癖性分、因縁はよく見えるものです。

Kさん始め多くの人々のおたすけを通して、父母はみずからの心—生き方を変え、その結果としていつしか運命が変わりました。

なぜ「人たすけたら我が身たすかる」のか？その解答がここにあります。

# 八月月次祭祭典講話

会長 芝 太郎

## 『一日一回おさづけの本について⑦』

ただ今、八月の月次祭をともに勇んでつとめて頂きました。十一月二十三日に予定しています六十周年ですが、まあ十一月になったらできるだろうと思っ  
ていますけれども、しかしこの様子ではちよつとまた見通しが立たなくなってきました。でもなんとか準備は進めていかないととは思っています。

### 大亮様と面談

それで特に『一日一回おさづけ』の読書感想文コンクールについてですが、今のところ七編の原稿が来ています。実は青年会長の中山大亮様にお会いしました。八月五日の本部朝つとめ後でした。読書感想文を記念行事としたことを十五分か二十分お話しでき、気さくに応対して下さり自分でも「読みます」

とおっしゃいました。

### 芝家三つの因縁

さて今月もその『一日一回おさづけ』についてのお話なんですけども、この本の一番大事なのは運命を因縁を変えろということなんです。芝家で言えば、①夫婦が揃わない。なかなか長く一緒に揃わない。早く若死にしたり離れ離れになる、しかも何代もそれが続くわけです。また②子供が育たない。特に男の子ができてみんな亡くなってしまふ。だから養子が五代も六代も続いている。③三つ目はめ事が絶えない。家族の中でね、財産争いとかのめ事が絶えない。この三つを変えないといけない。商売も大事かもしれないけれども運命を変えないといけない。因縁を変えろ。

それを始めだしたわけです、芝甚之助・祖父が。祖父の代では、しかし結局運命は変わらなかった。祖父自身、五十歳の前に奥さんに亡くなられます。男の子がいたけどやはり戦争で亡くなりました。だから残ったのが母、娘一人だけ。なんとか細々と残

ったんですね。また家の中のもめ事が相当あったらしいです。

### 修養科生から講師に

どうして変わったかということがきょうのお話ですね。結論から言えば「人を助けたら我が身たすかる」というおやさまの教えを実行した。特におさづけですね。父の場合は恩師の柳井徳治郎先生の言葉「宵越しのさづけを使わないように」つまり毎日使うように、と。これを心定めて実行した。十年二十年三十年経って因縁・運命が変わってきた。他には何もしてないんです。だから人をたすけたら我が身たすかるという証明をしたようなもんです。

本文 93 ページから出てくるんですけども、その時は昭和二十四年です。だから父は心の成人がともも早かった。昭和二十二年にシベリアから帰ってきました。帰ってきて母の姿を見て天理教をするよと決めた。それまでは天理教とか信仰とか無理解でしたから。すぐに修養科に入った。母が勧めたから。父はそこまで熱心にするつもりはなかったかも知

れない。まだその時は運命とか因縁とか分かってなかったと思うんです。とにかく天理教をするということを決めた。母が修養科をすすめた。まず修養科に入ってその話をしっかり聞いて下さい、と。とにかく勧められるままに入った。そしてそのお話がとても良かったんですよ。これは今まで聞いたことがない話だ。父はこれは本物だと思ったんですね。

修養科出たら昭和二十二年に修養科の講師になった。これも柳井徳治郎先生の勧めですね。修養科に入って一ヶ月したら喘息になり苦しい。それが半年以上続いたんですね。半年間、寝られない。夜に四枚も五枚も寝間着を変えるほど咳き込んで汗びっしょりになる、それが毎日言うんですからね。どんなに苦しいでしょう。息はひとときも止められない。その息が苦しいわけですからね。それをね、あんな、その苦しいのを助かりたいと思ったら修養科の講師になりなさいと言われた。修養科を出たばかりの人間がそんな先生になれるもんか？しかし、喘息苦しいのは助かりたいから、分からんけどもやれと言われたらやりますと心定めて、夫婦で

夜遅くに神殿にお誓いをして、それで帰ってきたらその晩からピタツと咳が、八ヶ月もゴホンゴホン苦しかったのが止まった。

そして講師となつて一生懸命勉強しながら素晴らしいと思つておやさまの話を伝えてた。ところがふとまた気がついた。これがね、ここがみそですね。大事なところですよ。話ばかりしてるけれども俺は通つたことがない。おやさまひながたというけれども実際に通つたことがない。通らないといけない、いや通りたい是非とも通りたい、そんな気持ちになつた。まんじゅう食べてもいけないのに美味しいですよって人に勧めるのと一緒なわけですよ。自分が食べて甘い美味しい、だからいいですよ、是非食べて下さいって言うならわかるけど、食べもしないでこれうまいですよおいしいですよって言ってるわけですからね。三日でもいいからとにかく通らなあん、通りたい。そう思つたんですね。ようぼくとして赤ちゃんに生まれたのがわずかな間に二十歳になつてるようなもんです。

### 灰になる運命

ところが宇佐大教会の詰所を預かつてる。母が寮長の立場でしたから。当時、ごろつきのような人たちがいたからとても留守にできない。昭和二十四年の頃のことです。

当時は結核療養所というのが今の憩の家入院棟の西側にあつて結核の人たちが多かつた、日本全体に。一度結核になったら助からないというぐらい、今のコロナ以上に怖かつたんです。

結核療養所に普段はもうそこに寝泊まりするんですよ。それで講師になつて、修養科の本校の方に用事ができて、本校の方にも授業があつたんですよ、そこへ行く。その時、時間があつたからか遠回りをして宇佐の詰所へ帰つて、また誘われるようにその裏口に出た。僕は覚えてますけどね、前に庭があつて、真ん中に土盛りをして植木があつて、ちよつと小さい池があつたかな。そして建物があつてその建物の中を通り抜けたら裏口に出て、裏口には畑とか作つていた、そこまでふらふらと誘われるように行つたら、布団が燃えてた。しかもその布団

が自分の普段寝てる布団。びっくりしてどうしたんやろうと思つて調べたら、当時の修養科生だった新静江さんが腹痛で早退して帰ってきて、ちよつとの違いで火事を防いでくれたんですね。

これ、不思議でしょう？静江さんがお腹痛くならなかったら帰つてこなかった。またそのまま寝てたら燃えてますよ。腹痛が治つた。治つたけれどもじつとしてなくて用事をしようと思つて寮長さんの部屋に行つた。二つも三つも四つも不思議が重なつたわけです。

父はここでとにかくよかつただけで済まさないで、その晩夫婦で相談をしねりあいをした。これは誰かが灰になる運命を、因縁でお前か俺か赤ん坊かその三人のうち一人もしくは全部が灰になる運命を因縁を教えてください。では運命を助けて頂くにはどうしたらいいか？父が書いてるのは貧乏になること事や、と。ここはちよつと誤解をしないように注意しておきますが、貧乏なのは結果としてであつて、貧乏になつたら助かるんじゃないんです。人を助けるために一生懸命になつたら結果として

物やお金はなくなるということなんです。

とにかく人を助けるおさづけを取り次ぐ。もうこの時は二十四年ですからおさづけの理を父は頂いて、毎日おさづけ取り次いでるんですね。それを続ける、もつと一生懸命するという心定めをここで昭和二十四年一月十七日にしてるんです。

自分のことをさておいてでも人のお世話をする。人助けをする。簡単じゃない、大変なんです。お助けというのは言葉は綺麗だけでも実際大変なんです。その人が助かるかどうかとも分からのやけどもうとにかく一生懸命。もう自分の真実を一生懸命注ぐ。これでもかこれでもかというぐらい。それで気がつくと自分の運命が助かる。父も祖父もその苦労人間は苦労せなあかんと、ただその苦労が因縁の苦労か人助けのお道の上の苦労か？同じ苦労ならお道の苦労を通りましようとおつたのが父母だったわけです。それが一番眼目ですね。ありがとうございます。

## ☆お知らせ☆

☆9月26日(日) 9時 本部月次祭 (祭典後は登殿参拝できます)

☆9月29日(水) 18時 詰所祭 (在住者のみにてつとめます)

☆10月3日(日) 10時 女子例会・はるのひ会

☆10月10日(日) 9時半 おぢばがえりひのきしんと男子例会 (詰所)

☆10月17日(日) 別席日 (教会を11時出発)

☆10月18日(月) 10時-茶道 13時-女なりもの勉強会

☆10月22日(金) 前日準備ひのきしん、神名流し (夕つとめ後)

☆10月23日(土) 11時 〈秋季大祭〉

☆10月26日(火) 8時 本部秋季大祭 (祭典後は登殿参拝できます)

☆10月29日(金) 詰所祭 (在住者のみにてつとめます)

☆11月23日(火・祝) 教会創立60周年記念祭

☆人生とは、生涯かけての心の成人・自分づくり

☆信仰とは人生観・世界観をみがきつづけること

そのために、用意されているのが

・おぢばがえり ・基礎講座 ・別席 ・三日講習会 ・修養科 ・講習

○修養科をおすすめしましょう! (毎月、25日までに申し込み)

・若い方=これからの人生の基礎固めとして

・年配の方=人生の美しい集大成のために